OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	永正八年七月二十五日御会和歌懐紙について
Author(s)	伊井, 春樹
Citation	詞林. 1995, 17, p. 30-40
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67367
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

永正八年七月二十五日御会和歌懐紙について

伊井　春樹

室町期の記録や詠草類には、当時しばしば催されていた和歌会が記録され、その作品も一部の私家集などに収められているのによって、様相をわずかながら知ることができる。ただ、参加者やすべての和歌となると明らかでないし、なおさらその場に提出された懐紙となると、資料そのものは数多く存するものの、大半は日付がないだけに、いつの折の作品なのか判断はきわめて困難である。ここに紹介するのは、そのような中にあって、永正八年（一五一一）七月二十五日の和歌会の懐紙であることが明らかな資料で、しかも二十八幅というまとまりがあり、宮中における御会の規模や参加者の顔ぶれを知る上において貴重な存在であろう。なお、この懐紙は、「思文閣墨蹟資料目録」第二五三号（平成五年七月）に掲載され、その後一括大阪青山短期大学が購入したものである。

和歌会で提出された懐紙の散逸を避けるためなのであろう、巻子本に仕立てて貼り込んだらしく、収められていた古い箱が残されており、蓋には「永正八年七月廿五日御会　後柏原院一座懐紙　一巻」と墨書される。しかし、現在の形態は、その巻子から一葉ずつ引き剝がして二十八幅にするが、装丁の新しさからすると近年になっての処置であろう。

懐紙には、初めに「秋日詠三首和歌」とし、「初秋月」「風前薄」「寄玉恋」の三首が記されており、現存本の詠者は「式部卿邦高親王」「正二位実隆」など二十八人である。これが箱書のように永正八年七月二十五日の御会和歌であることは、記録類には見いだせないものの、『再昌草』（第十一）には連続して、

（七月）廿四日、公宴懐紙

初秋月

よそよりも月の宮この秋やうき影みる水ぞ先はすゞしき

（二〇一三）

風前薄

こと草やなき心ちする花薄袖のなかなる野べの秋風（二〇一四）

寄玉恋

かめのうへの山なる玉の枝なれやおりてみがたき恋のなきは（一〇一五）

とあり、『雪玉集』にも「初秋月」（永正八七廿五御月次、九二三）「風前薄」（永正八七廿五御月次、一〇一九）「寄玉恋」（永正八七御月次、二一一三）として収められ、しかも実隆の懐紙の歌と一致するのによって、まさにその折の詠と知られるのである。ただ、『再昌草』では二十四日とし、『雪玉集』では二十五日として日付の異なるのは、御会の前日に整理したことによるずれではないかと思う。

公条の『称名院家集』にも、

初秋月

なべてよの風は音のみ月かげのめにはさやかに秋をみせける（五〇〇）

風前薄

ほにいでゝなるゝをみれば花薄人の袖まで露のあきかぜ（五七一）

寄玉恋

よしの河うかべる泡の玉とだにみせばや人にあだのいのちを（一二三六）

と三首を拾い出すことができ、これも懐紙の歌と一致するのによって、箱書きの通り、まさに永正八年七月二十五日の月次による御会和歌の懐紙であると知られるのである。ただ、現存の懐紙には永正八年七月の御会である旨の記録は一切添えられていないが、かつては極札なり添状が伝来し、それにもとづいて箱書もされたのであろう。さらに『碧玉集』（政為）にも、

初秋月　永正八年七月廿五日禁中月次御会

せみの声のこるもすゞし月ははや木のまを秋ともりそむる迄（四八〇）

風前薄　永正八年七月廿五日禁中月次御会

なびきあふおばなはしるや秋風にたがおもひぐさ色にいづらむ（四二九）

おなじ心（寄玉恋）を永正八年七月廿五日禁中月次御会に

おもふかひありてひろはむ玉もがな枕の下のしほひまつ身に（九八一）

と、ここでも同日の月次御会出詠歌が拾うことができる。

さて、箱には「後柏原院　一座懐紙」と記されているので、巻子本の形態を保っていた折には、冒頭に御会の主催者でもある後柏原院の懐紙が押されていたはずで、幅裁された後に散逸してしまったのであろう。そこで、後柏原院の『柏玉集』（私家集大成）にこの歌題の歌を求めると、

初秋月

手にならす物にもがなや秋立て扇にかへる袖の月かげ（巻四秋上、六二二）

風前薄

かぜたかき柳はあれど我かどの一むらすゝき先みだれつゝ
（同、六九一）

寄玉恋

滝つせに玉ちる程の思ひをも誰なくさめて袖はほさまし
（巻七恋上、一三五四）

と見いだし、ほかに同題の歌はないので、この三首が同じ永正八年七月の御会による懐紙和歌であり、本来はつれとして存在していたはずである。『後奈良院御集』にも、

初秋月（同年七廿五御月次）

夕月よひかりの中にしらるゝやみにしむ色の秋の初かせ
（一三）

風前薄（同）

山もとの霧の絶間のむら〳〵に尾花をみする野べの夕風
（一四）

寄玉恋（同）

はかなしや袖のなみだの玉のをのあはずは何にみだれそめけん（一五）

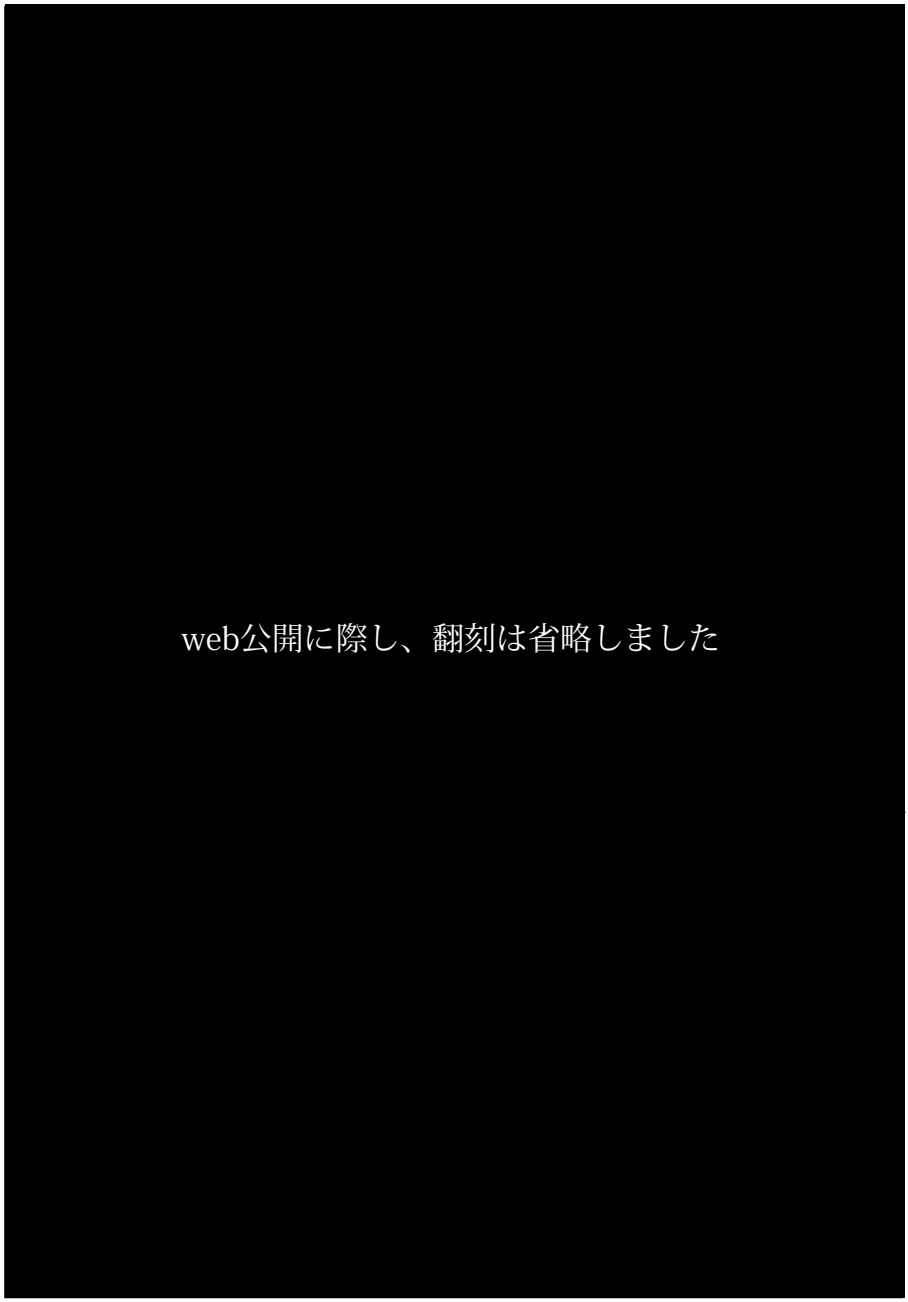
と、同題で連続して収載され、七月二十五日の月次との注記によって後奈良院も加わっていたことが確認できる。ほかの家集にも同題の和歌が見られはするが、三題とも重なる例はないため、今のところ追加できるのは三人である。これによって、現存する二十八人のほかに、少なくとも後柏原天皇、後奈良院、政為も御会和歌に出詠していたはずで、これだと三十一人からの構成による和歌会だったことになる。

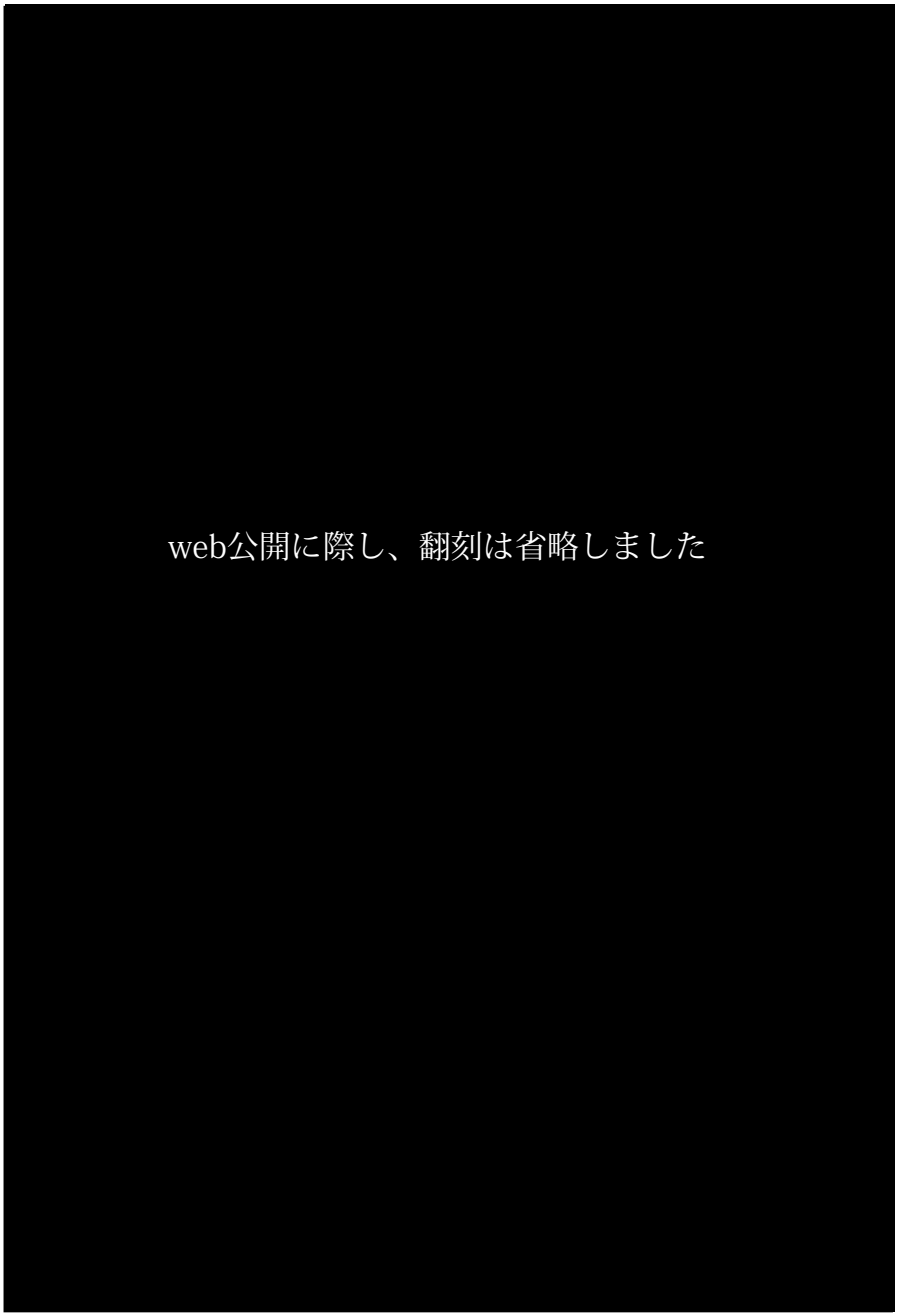
ところで、七月二十五日の和歌会について、「御月次」とするのによって、毎月定期的に催されていたはずだが、『実隆公記』等にはそれを確かめる記述はない。そこで永正八年に限り、和歌会が催された日程について『再昌草』を見ると、正月十九日禁裏御会始・三月二十四日公宴懐紙・五月二十四日公宴懐紙・七月二十四　日公宴懐紙・九月二十一日公宴懐紙・十一月二十四日公宴懐紙、と奇数月の二十過ぎに懐紙による歌会の存在が判明する。『雪玉集』になると、部立によって配列されているため各所に分散されてはいるが、「永正八正十九」とする正月の御会始ほか、「永正八二御月次」「永正八三御月次」「永正八四御月次」「永正八五御月次」「永正八六御月次」「永正八七廿五御月次」「永正八八御月次」「永正八九御月次」「永正八十御月次」「永正八十一御月次」と、二月から十一月まで月次による歌会が催され、実隆はすべてに参加していたことが知られる。なお、この年の御会の一部の資料を収めた家集としてほかに『後奈良院御集』と『姉小路済継卿詠草』があるので、これらをまとめて一覧表にすると次の頁のようになる。

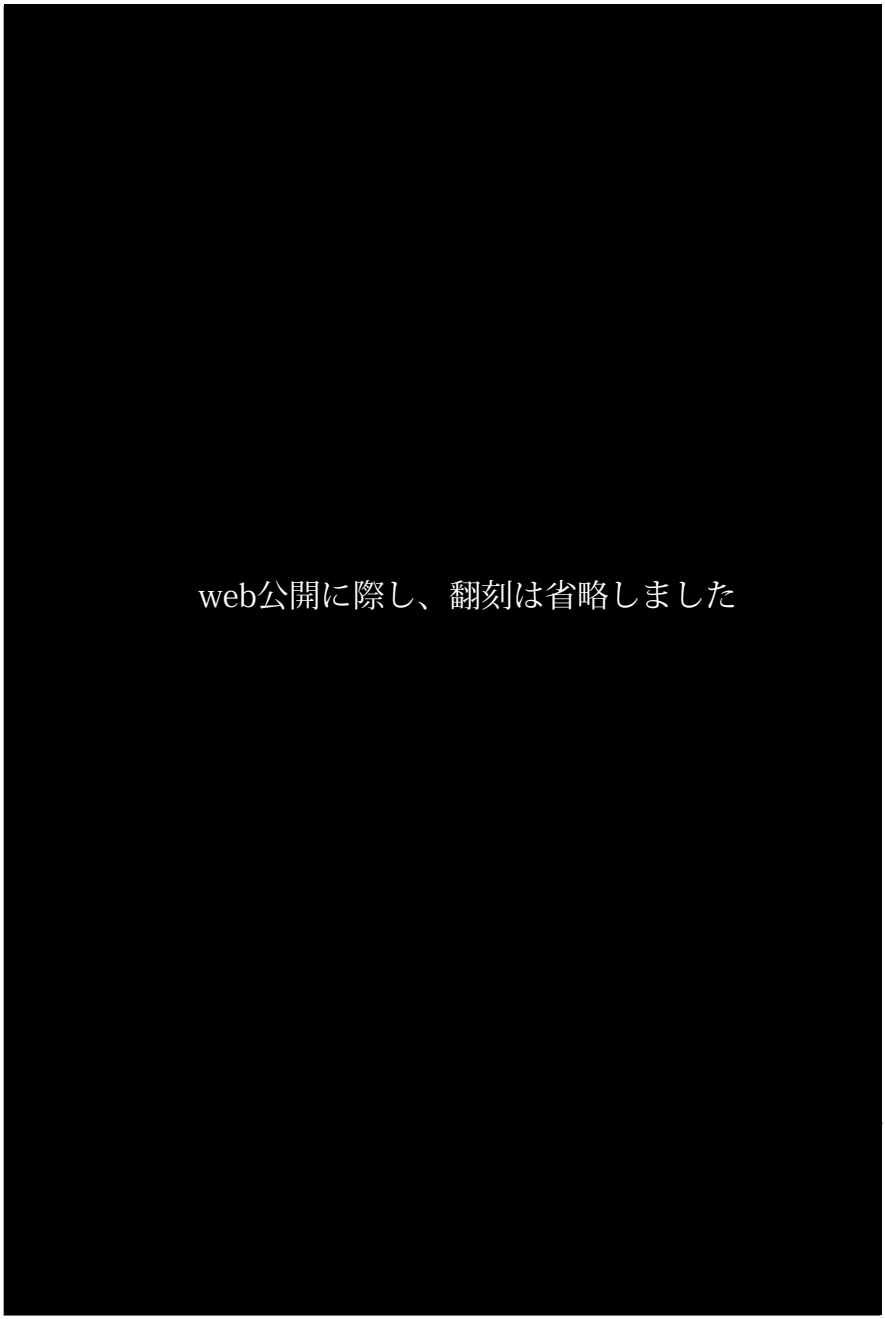
なお、『姉小路済継卿詠草』には、「永正八正廿五御月次」として「寄若葉(ママ)祝言」、「永正八三」として「花下言志」の一首、「永正八五」には「夏杜」「夏鳥」「夏夢」の三首を見いだす。ここでは日付のある歌題を抜き出してみたが、一連の御会ではない歌会題も含まれているようで、各作品で題が共通し

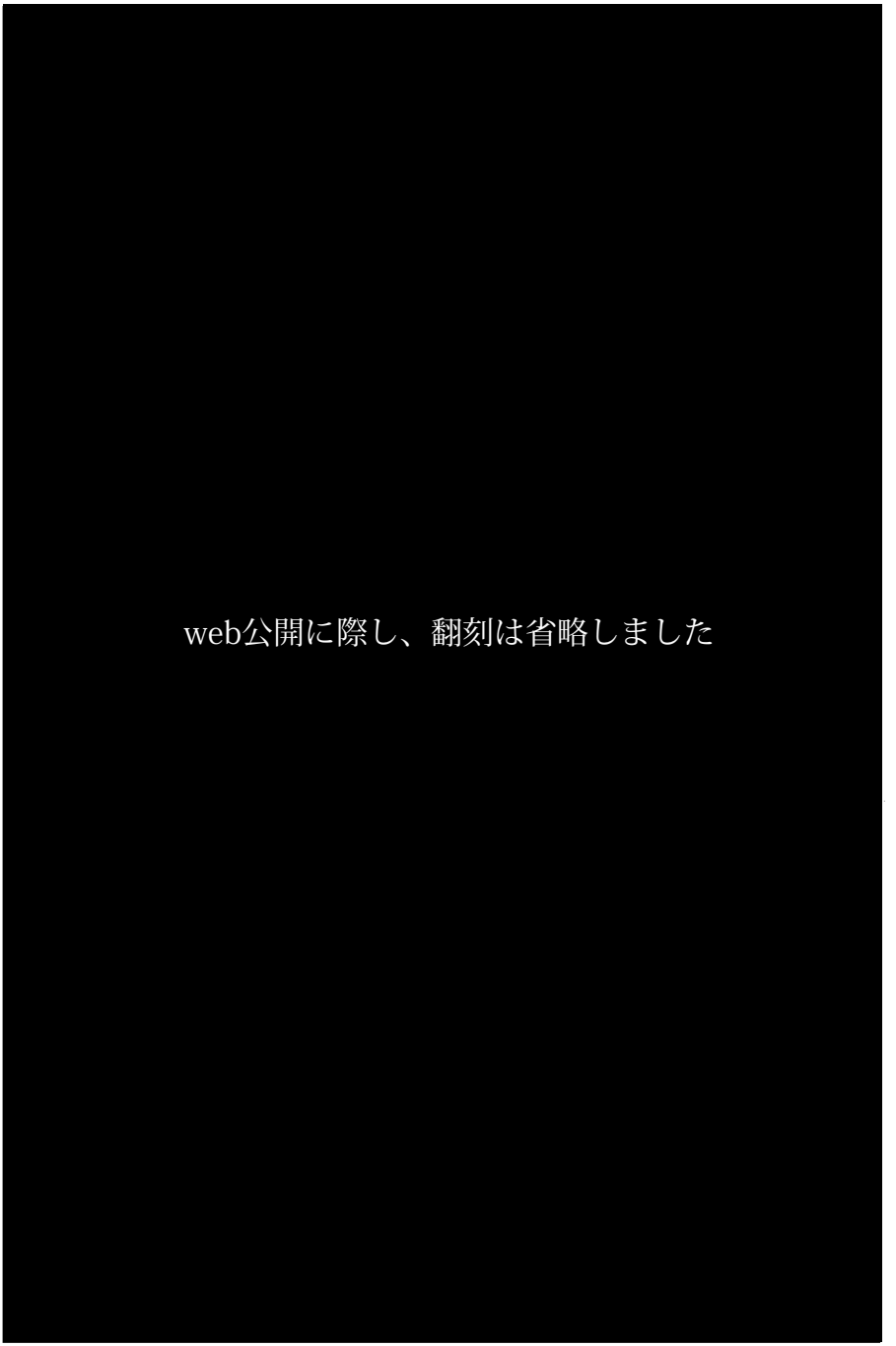
ない例も存する。ところが、『再昌草』に記されていた奇数月の公宴懐紙題だけはいずれの資料にも存するようで、これが懐紙による兼日題の歌会だったのではないかと思う。ともかく、その一環として七月二十五日の御会が存し、その参加者による懐紙がここに紹介する二十八点の資料というわけで、その様相を知る具体的な資料として貴重な存在といえる。以下、仮の通し番号を付して懐紙の本文を翻字しておいた。

	後奈良院	再昌草	雪玉集	称名院家集
正月一九日	寄若菜祝言	寄若菜祝言	寄若菜祝言	寄若菜祝言
二月二五日	海霞		春雨	初雪
	待恋		野分	郭公
			野宿	
三月二四日		花下言志	花下言志	花下言志
		残花薫風	残花薫風	残花薫風
		忍伝書恋	忍伝書恋	忍偽書恋
四月二十五日	待花		暁擣衣	初秋
	歳暮		春日	夏旅
			寄名所恋	
五月二五日	夏杜	夏杜	夏杜	夏杜
	夏鳥	夏鳥	夏鳥	夏鳥
	夏夢	夏夢	夏夢	夏夢
六月一五日	都立春		谷蕨	余花似春
	鹿声夜友		閑居虫	旅杖
七月二五日	初秋月	初秋月	初秋月	初秋月
	風前薄	風前薄	風前薄	風前薄
	寄玉恋	寄玉恋	寄玉恋	寄玉恋
八月				歳暮近
				郭公一声
九月二一日			夕霧	轟車
			蔦懸松	初秋月
			窓灯	風前薄
				寄玉恋
				暗夜梅
				虫怨
				汀氷
一〇月	葦間水鳥	葦間水鳥	寄忍草恋	寄忍草恋
	山家雪朝	山家雪朝	夕霧	夕霧
	恋不依人	恋不依人	蔦懸松	蔦懸松
			窓灯	窓灯
			山家雪朝	山家雪朝
一一月二四日	葦間水鳥	葦間水鳥	葦間水鳥	草間水鳥
	山家雪朝	山家雪朝		山家雪朝
	恋不依人	恋不依人	恋不依人	恋不依人


web公開に際し、翻刻は省略しました

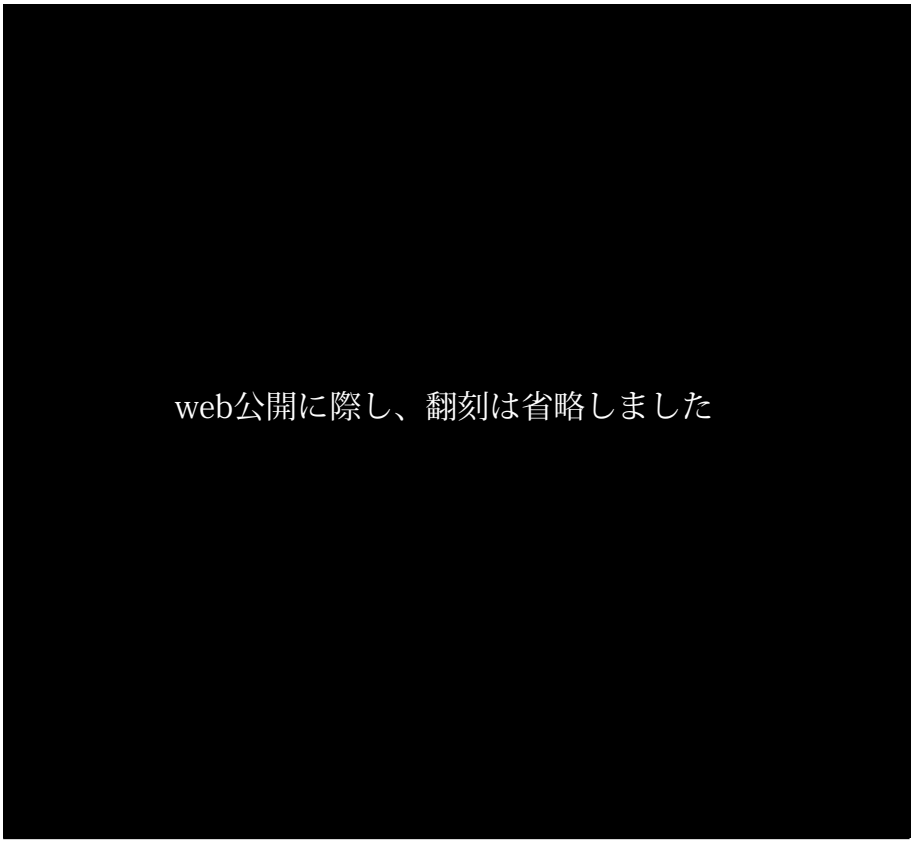

web公開に際し、翻刻は省略しました


web公開に際し、翻刻は省略しました


web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました

web公開に際し、翻刻は省略しました


web公開に際し、翻刻は省略しました